



## 国際会計基準（IFRS）への疑問

（1月のごあいさつ）

平成 22 年 1 月 6 日（水）

新年おめでとうございます。今年もよろしくお願い致します。

2005 年に EU が域内の貿易、投資行動等を表現する統一的な会計スタンダードとして採用した IFRS（国際会計基準）は、欧米を中心とした国際的な議論の真っ只中にある。

堀の外からではあるが、IFRS に関して疑問を感じるのはバランスシート（包括利益）重視と P/L（当期純利益）の軽視という点である。

企業活動の第一の目的は利益を稼ぐことであり、財産を増加させることはその結果であるからだ。本来の企業活動の流れは（1）利益の獲得（2）財務の健全化（3）財産の増加、即ち、財務諸表は事業の遂行結果の報告であるべきなのに、IFRS は財産の増減、商品価格的な結果の増減で企業活動を判定しようとしているような印象を受ける。

企業は事業活動により利益をあげる過程を明確にし、その過程を説明するために財務報告をする。そして利益獲得の過程である物づくりの地道な経営が企業を強化する。企業の利益獲得過程を中心にして、企業活動を適正に活写するところに企業会計の価値があると思っている。なぜならば企業の発展が産業や経済の発展につながるからだ。

ところが、B/S の比較から企業利益を決定するということは、極論すると投資活動の比較、投資家や投機家による金融商品の儲けの結果判断ということになりかねない。

企業の損益には（1）事業活動による損益と（2）投資活動による損益が含まれており、この 2 つをトータルして企業の損益であることは確かである。

しかし、企業の一定期間における経営の内容（当期純利益）を検討することが第一である。当期純利益は一定期間の企業活動の積み上げであり、その一層の検討が必要である。財務諸表の作成者も利用者も事業活動の積み上げた成果に関心を持たなければ、企業の向上発展、ひいては産業や経済の発展もない。

事業活動の損益（付加価値）に比べて、投資による損益（価格差額）は商品価格の増減という相場の高下の結果と似ている。

両者をひっくるめて期首の B/S と期末の B/S の差額によって企業活動の結果を判断することにしていれば、それは企業を商品化してその価格の値上り値下がり进行比较するような過程軽視となって結果偏重になる。

財務諸表（企業活動の表現）の国際的な統一を図るためには、バランスシート重視にならざるを得ないのかもしれないが、それが B/S の比較によって利益（包括利益）を決定するというのでは企業活動の過程（当期純利益）を十分に説明しつくせない。

事業活動を重視してこそ経営の向上が求められるのであり、投資結果のみを重視すれば企業は産業から離れて金融商品になってしまう。

公正価値評価という点を重視しすぎた結果、時価会計の問題（相場上昇の時は資産は過大評価となり、相場下落の時は過少評価となる心理的な計測基準）をも世界に波及させるおそれがあるのではないか。